

(記入日：2023年 9月 1日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

心理学統計法 (1年前期必修科目 2単位)、心理学統計法 (応用) (1年前期選択必修科目 2単位)、心理学実験 (基礎) (応用) (2年前期必修科目、後期選択必修科目、各 2単位)、認知心理学概論 (2年前期選択必修科目 2単位)、心理統計法特講 (1) (2) (大学院前期、後期選択必修科目、各 2単位) など

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

私の教育理念・目標は、学生が科学的方法によって心を理解し、さらに自ら問題を具体的に設定し、身の回りの人的・文化的資源と積極的に関わりながら、主体的に問題解決に至る態度を身につけることである。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

講義科目では、Teams 内の「ファイル」にパワーポイントなどで作成した資料が用意された。Forms を利用した「課題」が毎回実施され、学生の回答が平常点評価に活用された。認知心理学概論では、ビデオ視聴 (TED) を踏まえたレポートの提出を加えて、平常評価を重視した。心理学統計法においては、OA 教室で Excel を使用させて統計計算を行わせた。心理学実験では、レポートの提出、フィードバック、返却は、すべて Teams の「課題」を活用した。大学院の統計は、情報処理室に統計処理言語 R を導入し、統計処理を学生時自身が実行して口頭発表する形式をとった。出席者全員が毎週週末まで課題を提出する方法を実施した。

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

認知心理学概論の授業評価アンケートでは、「触発されて、もっと勉強したいという気持ちになったか」という設問に回答者 9名のうち 7名が「そう思う」と回答した。学生の興味関心の喚起に一定の効果が認められた。心理学統計法においては、エクセルファイルを事後に配布し、事後学修をうながした。大学院でもレポートにまとめる課題をしかしこれらの教育効果は、受講生により開きが大きく今後の課題となった。(エビデンス 1)。教授方法に改善に余地があると考えられる。

5 今後の目標 (これからどうするか)

講義科目では、内容の理解を深めるためにビデオ教材を適切に活用するとともに、レポートなどで学生に考える機会を提供する。学部 1年の統計、大学院の統計に共通する事項として、基礎的知識の理解と、実践的・応用的な問題解決技能の両方に課題があったことから、今後、受講生の理解を確認するステップを設けるとともに、応用的な課題を加えて問題解決技能の修得を促したい。学部 1年次の心理学統計法では、受講生の理解を考慮して後期から教室と使用するアプリを変更することとした。

6 エビデンスとなるもの (資料の種類などの名称)

- 1 授業評価アンケート (UNIPA 非公開)
- 2 Office 365 Teams 各科目のグループ (非公開)

ティーチング・ポートフォリオ

心理学科 氏名 田中 裕

(記入日：2023年 9月 7日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

「心理学概論 (基礎)」「心理学実験 (基礎)」「心理学実験 (応用)」「心理実習 (入門)」「心理調査法」「生理心理学特講 (1)」「生理心理学特講 (2)」など。

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

教育理念・目標として、学生自身にも内在している身体および脳の視点から心を理解することを目指している。日常生活の中に根づいているこの視点を出発点として、自ら問題を具体的に設定し、身の回りの人的資源も使って主体的な問題解決に至る方向へ導くよう心がけている。さらに、可能な限り個別対応をすることで、学生の多様な個人特性に合わせた教育を行うように努めることも理念・目標としている。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

自身に内在する視点から主体的な問題設定から解決に至る機会を作るために、心理学概論 (基礎) では可能な授業テーマ全てにおいて脳や身体に帰結するようにした。その際に脳や身体についての補足的な学びを取り入れた。心理学実験 (基礎) では、自身の身体感覚を明確化して取り扱い、具体例提示を多くした。さらに相互協力によるレポート課題解決から、心と身体感覚の関連を検討させた。また、心理学ゼミナールでは受講生の個性に合わせた個別対応・個別指導の時間を長く取ることで、より綿密な指導を心がけた。

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

心理学概論 (基礎) では、補足的な学びの成果もあり学修過程において心と関連づけて考えることが確認された。心理学実験 (基礎) ではレポート作成時に配布資料の用意と具体例を多く提示することにより、内容理解が促進されて昨年度よりは学修成果が上がったことが確認された。しかし、まだ理解できていない

受講生がいることを認識している。心理学ゼミナールでは受講者の個性に合わせた個別対応・指導が効果的であったため、学修成果が上がったことが確認された（エビデンス 1 および 2）。

5 今後の目標（これからどうするか）

どの授業においても、主体的な問題解決する方向を向かせることはできたと考える。しかしながら、昨年度までも課題であった個人差、特に基礎能力および興味については、個別対応だけで補填できない事例が複数確認された（特に心理学実験（基礎））。今後は習熟度別の新たな資料を使用した事前事後学修の促すことを模索する。それによりさらなる効率的な授業進行を工夫したい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 リアクションペーパー（非公開）
- 2 小レポート（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

桂瑠以

(記入日：2023年9月2日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

「基礎ゼミナール」「心理学演習」「コミュニケーション論」「統計と社会」「特殊実験演習」「心理調査概論」「特殊研究」「卒業論文指導」など

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

教育理念・教育目標として、学生が心理学、とりわけ社会心理学領域に係わる学修を通じて、社会の様々な事柄に対して広く関心や問題意識を持ち、それらの問題を実証的・多角的に考え、主体的に問題解決を行い、社会に貢献していく態度や能力を身に付けられることを目指して教育を行っている。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

学生が主体的・実践的に学修を進めることを目指して、授業法や教材等の工夫を行った。一例として、心理学演習などの授業では、文献検索・収集、発表資料の作成、レジメによる発表、討論を行い、各自が問題意識を持って学修し、学修成果を学生相互で共有し、学修を深められるように指導した。また心理調査概論などの授業では、グループでの質問紙調査、面接調査の実習を行い、調査の目的、調査方法、結果のまとめ方、データ処理の方法等を学修し、実際に調査を実施して、心理調査の方法や仕組みを実践的に学んだ。基礎ゼミナール、コミュニケーション論、統計と社会などの授業では、講義にあわせて、毎回、小レポート課題を課し、学修内容の深化を図り、また挙げられた質問には可能な限り次回の授業で回答や説明を行い、双方向でのやりとりになるように努めた。さらに、授業内容に応じてグループワークやグループ学習を取り入れ、グループで意見交換を行い、主体的に学修するように指導した。

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

心理学演習、特殊実験演習、心理調査概論などにおいては、学生が主体的・実践的に学修を進め、授業時間外にも事前・事後学習を行い、教員からの指導や学生同士での支援を生かして、発表やレポート作成の質を高めていったことが確

認できた(エビデンス 1, 2)。一方, 学修成果や学修意欲に個人差が生じている様子も見られ, 個別の支援をあわせて行いながら, そうした差異に柔軟に対応していくことが今後の課題と考えられる。

5 今後の目標 (これからどうするか)

学生が, 様々な社会事象や社会の問題に対して広く関心を持ち, 自ら問題解決していけるような実践力を身に付けていくことが今後の目標に挙げられる。また, 学修の意義や目的を理解し, 自ら学修意欲を持って学修に取り組むよう, 授業内容及び授業方法等を今後も工夫していくことが挙げられる。

6 エビデンスとなるもの (資料の種類などの名称)

- 1 小レポート課題, 授業成果物(非公開)
- 2 前期末試験, 期末レポート(非公開)

ティーチング・ポートフォリオ

心理学科 佐藤 哲康

(記入日：2024年2月27日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

【心理学科科目】

青年心理学 (2年次半期：選択必修科目 2単位)、心理実習 (基礎) (3年次通年：選択必修科目 1単位)、心理演習 (3年次通年：選択必修科目 4単位)、

【他学科科目・教職課程科目】

教育心理学 (中高免許状 2年次半期：必修科目 2単位、児童教育学科 1年次半期：必修科目 2単位)、教育相談 (中高免許状 2年次半期：必修科目 2単位、児童教育学科 2~3年次半期：必修科目 2単位)、

【大学院科目】

臨床心理面接特論 I (大学院半期：選択必修科目 2単位)、臨床心理面接特論 II (大学院半期：選択必修科目 2単位)、心理療法各論 I (大学院半期：選択必修科目 2単位)

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

授業の理念や目標は学生が心理学または教育学の専門性を実践で活かすことのできる教育である。人材を育成するためには教科書だけではなく、臨床現場や地域での実践的な活動を通じて得られた、これまでの経験を現状に即して伝えることだと考える。教育を通じて得られた知識と社会に目を向ける応用力、柔軟な思考力と対応力を学生一人ひとりが身につけることも教育目標としている。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

全ての担当科目において、授業内容をまとめた配布資料と授業で使用するプレゼンテーション資料を事前にクラスの Teams に公開し、各自で内容を確認して疑問や意見を準備するように求めた (エビデンス①)。テキストや参考書を指定している科目では併せて予習範囲を指定した。部分的ではあるが反転授業を取り入れ、学生の積極的な授業参加と問題把握力が高まるように取り組んだ (エビデンス②)。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

全ての科目において、授業終了後にリアクションペーパーの提出や Microsoft Teams へのコメントを求め、学生の理解とフィードバックを即時授業に取り入れた（エビデンス③）。事前学修の疑問や意見は授業内で回答し、リアクションペーパーやコメントについては必要に応じて Teams の各科目チャンネルに回答を掲示して、学生と共有した。

授業の工夫と取組みの結果、学生の理解と満足は授業評価アンケートから十分な理解の項目で 97%、総合的な満足の項目で 99%の「そう思う」または「どちらかというと思う」の回答が得られた。「どちらともいえない」を含む、低い評価が 3%認められたことは、20 名以上の科目では学生の表情や反応、理解の確認が不十分だったと反省した（10 名以下の科目では理解と満足が共に 100%であった）（エビデンス④）。

5 今後の目標（これからどうするか）

2024 年度は年間通じて学生の表情や反応、理解の確認を心がけたい。学科科目・教職科目において、20 名以上が履修する場合でも学生一人ひとりの声に耳を傾けよう工夫する。2023 年度の反省に挙げた学習と理解の定着は短期的なものにならず、試験の評価点や回答から例年と同様に回復したと感じている（エビデンス④）。引き続き、学習と理解が長期的なものになるような手段を考えていきたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ① 授業で使用する配布資料とパワーポイント（学生のみ公開）
- ② 2023 年度授業シラバス（公開）
- ③ 提出されたリアクションペーパーと Microsoft Teams へのコメント（非公開）
- ④ 学生授業評価アンケート（公開）
- ⑤ 学生が回答した試験答案（非公開）

(記入日: 2024年2月29日)

1 教育の責任 (何をやっているか: 担当科目)

心理学ゼミナール (3年通年必修科目 4単位)、臨床心理基礎実習 (大学院通年必修科目 4単位)、臨床心理実習 II (大学院通年必修科目 4単位)、臨床心理査定演習 I, II (大学院前期、後期必修科目、各2単位) 深層心理学 I (大学院前期、後期選択科目) 等

2 理念 (なぜやっているか: 教育目標)

教育理念・目標は、学生が臨床心理学の知識と実技を座学と演習、実習により習得し、習得した技術を心理援助に実践できることである。心理臨床専門家としての援助技法を習得する。さらに、臨床心理的援助法の開発と研究手法も身につける。

3 方法 (どのようにやっているか: 実践の工夫)

演習授業の場合、学生が主体的に学べるように、実際にプレイセラピー実施前後の気分変化の採取データ等を用いて各種療法の効果などを記述させる。また、各種心理尺度を体験しフィードバック用のレポートを書くよう指導した。

実習授業の場合、複数教員担当の授業などでは、教員同士のロールプレイを観察させた後に学生同士のロールプレイを実演し、振り返り、ディスカッションなどを経て心理臨床専門家としての技術を研鑽させた。

心理査定演習、深層心理学では、受講者本人の心理テストや芸術療法を行い、解析方法を指導し、本人が自分の心理検査結果や芸術療法の深層心理を解釈し、それによって臨床家としての自分を把握し、より援助者としてふさわしい資質を延ばすように工夫した。心理テストの結果は個人情報に触れるため、教員と一対一でのフィードバックを実施した。一方で芸術療法は集団療法等で自分と他者の違いを楽しんだりアイデンティティーの確立に役立つ場合もある為、受講者が全員居る場で本人の解釈を自分で行わせた。それにより集団療法のファシリテーターを任せられるように工夫した。

4 成果 (どうだったか: 結果と評価)

演習授業の場合、文献検索の手助けが必要であった。レビューを行うことはできた。しかし、問題を見出し、研究計画を立てることに困難を感じる学生が存在した。その為、集団的に指導した去年度までよりも個別指導を心がけた。

実習授業の場合、学生が実際に模擬面接を行い、インタビュー方法、利用者とのかかわり方、表現方法などを学ぶことができた。コロナ禍を契機に始めたが、オンラインによるSV陪席で大学院卒業生達の内容の濃い実践的な話を聞いてディスカッションする実習を継続している。将来現場で知っておくべきこと、立ち居振る舞い、支援内容などを解説してもらった。そのことにより内容は踏み込んだものになり、単に見学に出かけるよりも現場で起こりがちなトラブルや失敗をカバーする手法や、回避する技術をも学ぶことができた。

深層心理学の芸術療法のスキルはそのまま心理相談センターのコラージュ集

団療法に反映され、受講した学生達が活躍してクライアントのケアにあたり、好評を得ている。

5 今後の目標（これからどうするか）

演習授業で授業外に個別に資料収集とレポート作成を行う機会を増やす。またビッグデータ等の情報に普段からアクセスできるようにする。また、心理学ゼミナールで犯罪心理学を学びたい3年生がもっと犯罪心理学を学びたいという要望が出た。簗下の計画ではゼミナールは卒業論文へとつながる重要な研究手とレポート作成方法を学ぶ演習であると考えていた。芸術療法は卒業論文の研究法を学ぶためのツールとして療法実施中の観察方法などを実践していた。ゼミナールで犯罪心理学を教える準備はしていなかった。その為、今年度はシラバス変更しない程度にその要望に対応したカリキュラムに微調整した。来年度は、犯罪心理学のみをメインとした専任教員が入植する為、新任と簗下の役割を明確にし、犯罪心理学も学べる心理学ゼミナール（新任）と芸術心理学も学べる心理学ゼミナール（簗下ゼミ）と分けて実施する工夫を検討中である。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

リアクションペーパー(非公開)

心理相談センター管理運営委員会議事録（非公開）

川村学園女子大学心理相談センターHP（公開）

[集団コラージュ療法開催日\[1~3月分\] | 川村学園女子大学 \(kgwu.ac.jp\)](#)

ティーチング・ポートフォリオ

松岡靖子

(記入日：2023年8月28日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

学部：基礎ゼミナール (1年前期必修科目2単位)、発達心理学 (2年後期必修科目2単位)、教育・学校心理学 (2年前期選択必修科目2単位)、心理演習 (3年通年公認心理師科目4単位) など

大学院：臨床心理基礎実習 (大学院1年前期選択必修科目2単位) など

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

学生が心に関する幅広い知識を得ることによってその知識を通して学生自身の経験や世の中で起こっている問題を新たな視点から見つめ直し、更に主体的に問題解決の方策を探っていく方法と態度を身につけることを目標として教育を行っている。それにより川村学園女子大学が目指す、激しく変化する社会を柔軟に乗り越えるための「教養」を身に着けた自覚ある女性を育成できると考えている。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

どの講義においても、学生が心理学の知識を自分の経験や世の中の問題とつなげて理解することができるように、知識とつながる具体的な例を多くあげたり、視聴覚教材を利用したりといった工夫を行い、解説している。また、グループワークを取り入れ、自分の考えを伝え、他者と共有し、更に考えを深めるといった経験を重視している。

発達心理学などの講義中心の科目においては教科書の要点をつかむためのプリントを作成し、教科書と自作のプリントを併用しながら講義を行った。また Microsoft Teams の Forms を用い、1回の講義ごとに授業の振り返りコメントの入力を求め、リアクションペーパーの代わりとした。Forms に記入された質問は可能な限り次回講義のはじめに取り上げて回答し、疑問を残しておかないようにするとともに、一方通行ではなく相互のやり取りで講義が構成されるという実感を学生にもたせるように工夫した。

1年生にとって大学生活の入り口となる基礎ゼミナールでは、学生がグルー

プで協議する課題を多数設定し、小グループで学生同士の相互理解を深めながら課題に取り組むグループワークを行うことで、今後の学生生活を支え合う仲間づくりを心がけた。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

講義形式の授業については、学生がそれぞれ自分の経験とつなげ合わせながら理解を深めていることが **Forms** のコメントやレポート、川村学園女子大学令和5年度前期授業評価アンケートで確認された（エビデンス1、2、3）。特に前期授業評価アンケートにおいては単独担当科目の9割以上の回答者が授業に「満足できた」もしくは「どちらかという満足できた」と回答し、自由記述でも視聴覚教材の活用や、**Forms** での質問に対して次回授業で回答していく形がとても理解しやすかったとの感想が寄せられた（エビデンス3）。

5 今後の目標（これからどうするか）

学生がより社会的事象に興味関心を持ち、心理学的視点から考えることができるように事前事後学修を設定し、具体的に促していく。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. **Forms** 記録（非公開）
2. 前期末レポート（非公開）
3. 川村学園女子大学令和5年度前期授業評価アンケート

ティーチング・ポートフォリオ

松岡靖子

(記入日：2024年2月23日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

学部：基礎ゼミナール (1年前期必修科目2単位)、発達心理学 (2年前期必修科目2単位)、教育・学校心理学 (2年後期選択必修科目2単位)、心理演習 (3年通年公認心理師科目4単位) など

大学院：臨床心理基礎実習 (大学院1年通年必修科目2単位) など

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

学生が心に関する幅広い知識を得ることによってその知識を通して学生自身の経験や世の中で起こっている問題を新たな視点から見つめ直し、更に主体的に問題解決の方策を探っていく方法と態度を身につけることを目標として教育を行っている。それにより自らの将来像の模索に積極的に関与し、進路について考えることのできる「教養」を身に着けた自覚ある女性を育成することができると考えている。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

どの講義においても、学生が心理学の知識を自分の経験や世の中の問題とつなげて理解することができるように、知識とつながる具体的な例を多くあげたり、視聴覚教材を利用したりといった工夫を行い、解説している。また、グループワークを取り入れ、自分の考えを伝え、他者と共有し、更に考えを深めるといった経験を重視している。

後期共通教育科目のライフプランニングにおいては特に主体的な学びを重視している。心理検査を行って自己分析に結び付けた上での自己PRの作成、就職支援室の見学、ライフサイクルゲームを用いたグループワークなど実際に身体も動かして関わる時間を多く設定している。また、それぞれが興味のある職業・資格・企業などについて1つ自分で決定して調べ、発表するという課題を作っている。短時間ではあるが、1年生から発表の機会を作ることで今後の準備につながると考える。

教育学校心理学などの講義中心の科目においては教科書の要点をつかむため

のプリントを作成し、教科書と自作のプリントを併用しながら講義を行った。また Microsoft Teams の Forms を用い、1回の講義ごとに授業の振り返りコメントの入力を求め、リアクションペーパーの代わりとした。Forms に記入された質問は可能な限り次回講義のはじめに取り上げて回答し、疑問を残しておかないようにするとともに、一方通行ではなく相互のやり取りで講義が構成されるという実感を学生にもたせるように工夫した。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

講義形式の授業については、学生がそれぞれ自分の経験とつなげ合わせながら理解を深めていることが Forms のコメントや川村学園女子大学令和4年度後期授業評価アンケートで確認された（エビデンス1、2）。特に川村学園女子大学令和4年度後期授業評価アンケートにおいては単独担当科目の9割以上の回答者が授業に「満足できた」もしくは「どちらかという満足できた」と回答した（エビデンス2）。しかし、今年度は2年生・3年生のキャリアプランニング履修者が例年と比べ少なかったことから、ライフプランニングでの学びが進路への積極的な関与には繋がっていない可能性がある。就職活動につながる課題として、今年度は講義のテーマに関するニュースを検索してそれを自分の問題意識とつなげてまとめるという課題を追加し、面接などで質問されることがあるという説明を行ったが、来年度は更に進路選択に向けての取り組みを行う必要があると考えている。

5 今後の目標（これからどうするか）

学生がより社会的事象に興味関心を持ち心理学的視点から考えることができるよう、そして更に自己理解を深め進路選択に積極的に関与できるように事前事後学修を具体的に設定し、自主的な学びを促していく。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. Forms 記録（非公開）
2. 川村学園女子大学令和4年度後期授業評価アンケート

ティーチング・ポートフォリオ

文学部心理学科

森島遼

(記入日：2024 年 1 月 9 日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

<学部>

基礎ゼミナール

スポーツ・健康心理学

公認心理師の職責

精神疾患とその治療

人体の構造と機能及び疾患

健康・医療心理学

心理学ゼミナール

<大学院>

臨床心理実習Ⅱ

精神医学（保健医療分野に関する理論と支援の展開）

心身医学（保健医療分野に関する理論と支援の展開）

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

多様化の進む社会において、他者の立場や心理を慮り、共生していくことが求められている。様々な疾患や障害に関して理解しそれに伴う困難を知ろうとする姿勢を養うことが第一の教育理念である。また、高度情報通信社会が推進される中、インターネットや SNS の普及により信頼性の低い情報があふれている。正しい情報を取捨選択できるよう科学的・論理的な思考を身に着けられるよう促すことが第二の教育理念である。これらの推進が本学における公認心理師養成カリキュラムにおいても、共感性と科学的思考力をもった専門職の養成に寄与し得る。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

担当講義で精神疾患、身体疾患、難病、社会格差などを取り扱う中で、講義による説明だけでなく、様々な資料を活用して個別の知識並びにそれに伴う困難について理解が進むよう工夫を行った。また、本学の学生の特徴を鑑み、適宜グループディスカッション

ンを行った後、各グループで出た意見を教員が集約して全体で共有するなどのアクティブラーニング形式の時間を取り入れた。大学院では、講義の最終課題としてレポートや、実習指導の場（SV等）において、精神疾患等の当事者家族の立場をより深く理解し寄り添った支援に繋がるよう課題設定や指導も行った。

多くの講義ではほぼ毎回の確認テストを実施した。また、必要に応じて講義の中で最新の学術的知見も取り上げた。これらにより、知識の確実な定着ならびに科学的・論理的思考を促した。

ほぼ全ての講義の最後には Google form によるコミュニケーションフォームを実施し、毎講義の振り返りや知識・思考の整理の場を提供した。コミュニケーションフォームで提示された疑問や要望はその後の講義で適切にフィードバック・対応した。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

毎講義のコミュニケーションフォーム（及び大学院のレポート課題）において、他者の立場にたった共感的理解を示す記述が非常に多く見受けられた（エビデンス①、エビデンス②）。また、最新の学術的知見に対しても驚きや関心が示された（エビデンス①）。さらに、学部の最終テストではすべての学生が高得点をとっており、知識の十分な定着がみられた（エビデンス③）。これらの取り組みにより、担当講義に関して 2023 年の授業アンケートにおける授業満足度（そう思う～そう思わない、の 5 段階）では、“そう思う”と“どちらかという、そう思う”の合計が、いずれも 100%であった（エビデンス④）。

5 今後の目標（これからどうするか）

来年度以降も同質の講義を提供できるよう事前準備や講義後の振り返りを行っていく。今年度はテキストに下線を引かせることを中心に行い、講義の補足をスライド提示のみにて行ったが、来年度以降は必要に応じて提示するスライドの配布も検討する。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ① コミュニケーションフォーム（非公開）
- ② 大学院のレポート課題（非公開）
- ③ 学部の各講義の最終テスト（非公開）
- ④ 担当教員の授業評価アンケート（非公開）